

## 弾き歌いの実践を通した分析的・創造的視点における省察について

### Reflection from an Analytical and Creative Perspective through the Practice of Playing and Singing

島川 香織\*

Kaori SHIMAKAWA

#### 抄 録

弾き歌いの実践を通した学生ABCの省察において、全般的に分析的視点としてのプロセスや結果の考察及び創造的視点としての結果の考察が為されたが、創造的視点としてのプロセスの考察は為されなかった。このことから、子どもたちに対する弾き歌い指導の経験のない学生において、プロセスの中で創造的視点としての多様なケースを想定し対応する認識が難しいと考えられる。

#### I はじめに

青木久子(以下青木)は、津守真(以下津守)の「おとなは、その表現を手がかりにして、子どもの世界を理解する。子どもは自分自身の心の願いを、自分でも十分に理解していない。おとなが理解することによって、子どもは次の段階へと心的発展をする」「理解するとは、子どもの表現を自らの表現の可能性として受け取り、そこで理解された意味を、自分と他人に共通のことば、あるいは伝達可能な行為に移すこと」<sup>1)</sup>を引用し、受け手の行為による表現が子どもとの関係に意味をもつことが追及されていく視点であるとしている。<sup>2)</sup>

筆者は、保育士・幼稚園教諭・小学校教員養成課程における保育内容表現や初等音楽科教育法という資格取得のための授業科目に加え、1年生春学期(前期)から、音楽実技の個人レッスン・グループレッスンを軸とする音楽Ⅰ～音楽Ⅳ(ⅠⅡⅣは「器楽」、Ⅲは「伴奏法」、ⅠⅡは資格取得必修科目、2023年度現在)という授業科目を担当している。ここでは、音楽実技のソロ曲や弾き歌い等、直接学生への実技指導に携わる中で、教員養成としての観点から授業実践を行うことが不十分であり、将来教育現場に立つことを目指す学生に対し、音楽実技のレッスン内容が教育者にふさわしい視野で、学生自らが深い学びをすることにつながる学習環境が必要十分には提供されていないと感じられている。それでは、どのようにすれば、教育者の育成につながる授業カリキュラムが可能となるのであろうか。本稿では、このような問題意識を基に、子どもたちの表現の受け手としての教育者による表現が、音楽実技の個人レッスンを通してどのように教育実践につながるのか、学生の省察としての認識から検証を試みる。

---

\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

## II 子どもの表現を手がかりとした教育者の表現

津守は「子どもが、自分で満足がゆくほどに遊び、また描くとき、そこには子ども自身が深くかかわっているから、それぞれの子どもの本質的で個性的な心の傾向が表現される。個人の自己表現は、ひとりだけが他から切り離されるのではなく、他の子どもとの共同の場でなされる」<sup>3)</sup>とし、これについて青木は「(子どもたちの)表現を読み解くことから保育が始まり、出来上がった作品だけではなくその過程の心を見て、(教育者は)関係の中で生まれた表現を通して子どもの内的世界が少し理解できて応答できる」としている。<sup>4)</sup>また、津守の「子どもの行為を表現として見るとき、子どもと同じような行動空間、環境、立場、能力の範囲に置かれたならば、自分も同様の表現をする可能性があることを想像することができる」<sup>5)</sup>について、青木は「どんな場合も共通理解の可能な自分と同じ人間同士として関係を結び、そのことは異質な人間が共同生活をする大前提であり、子どもが表現する過程、表現したものの中にこそ心が表れる」と示した。<sup>6)</sup>このように、子どもたちが、他の子どもたちとの共同の場において遊び等を通して、本質的で個性的な心の傾向としての表現がなされるために、教育者と共有されうる行動空間や環境で、教育者は子どもたちの表現過程に子どもたちの心が表されているという同じ人間としての共通理解に基づき、対等な目線で子どもたちの能力や表現を認識して教育者自身の表現を行う必要がある。例えば、教育者が子どもたちの歌唱と合わせて弾き歌いを実践するとき、教育者自身の表現やレベルに少しでも合わせようと指導を試みるのではなく、子どもたち独自の能力や表現の中に、子どもたちの心が表されており、対等な人間同士として子どもたちの内的世界に応答する形で教育者自身の表現を実践する必要があるといえる。

## III ALACTモデル

前章では子どもの表現を手がかりとした教育者の表現に言及した。本章では、教育実習生の育成を念頭に置いた Korthagen (2001) による ALACT モデルに言及し、教育者の表現を育成する授業構成について考察を試みる。

脇本健弘(以下脇本)は、Korthagen らによる経験による学びのプロセスとしての ALACT モデルで、実習生を教師に置き換え教師の文脈における「経験学習」を以下図1のように示している。<sup>7)</sup>

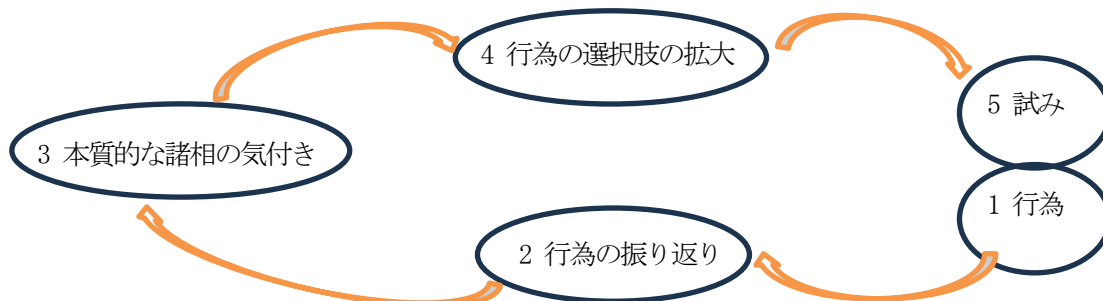


図1 ALACTモデル (Korthagen et al. 2001)

〈脇本健弘 教師の学びを科学するーデータから見える若手の育成と熟達のモデルーより〉

協本によれば、ALACT モデルは大学において教師教育者が実習生のサイクルを回せるような支援を念頭に置いて構築されており、1. 行為 2. 行為の振り返り 3. 本質的な諸相への気付き 4. 行為の選択肢の拡大 5. 試み というプロセスを含んでいる。それによれば、1. 行為は、経験をする段階、2. 行為の振り返りは、1. 行為における経験を振り返る段階、3. 本質的な諸相への気付きは、経験を構造化し、分類等を行う段階、4. 行為の選択肢の拡大は、それまでのプロセスをふまえて具体的にどのように行動するのか思考する段階、5. 試みは、実際に行動を行う段階であり、ここでの5. 試みは、1. 行為とリンクすることでALACT モデルのサイクルが循環する。このように、ALACT モデルでは、経験を振り返り、構造化し、それらをもとに次の行動を選択、実行していくというサイクルとなる。

次にALACT モデルの「経験学習」について、前章で示した子どもの表現を手がかりとした教育者(実習生)の表現の育成について弾き歌いの実践例について示す。学生の具体的な記述については、第VI章で取り上げる。

表1 ALACTモデルに準ずる実習生の弾き歌いの実践

1. 行為	対象となる作品の弾き歌いの実践
2. 行為の振り返り	弾き歌いの実践について振り返る
3. 本質的な諸相への気付き	振り返りの内容から弾き歌いの実践での本質的要素に気付く
4. 行為の選択肢の拡大	子どもの表現を手がかりとする教育者の表現を提案する
5. 試み	子どもたちの表現とともに教育者の表現を実践する(実習・音楽ワークショップ等)

#### IV 教育デザイン研究における省察

本章では、スーザン・マッケニー(以下マッケニー) とトーマス・C・リープス (以下リープス) による教育デザイン研究における省察について取り上げる。

マッケニー、リープスは、教育の分野では省察に高い価値が置かれているとし、省察の対象には、理論的インプット、実証的な結果、主観的な反応が含まれるとした。また省察は、推論によって推進され、既存のアイデア間のつながりが新しいアイデアにつながる可能性があるとしたうえで、創造的な思考や感情が必要であるとしている。<sup>8)</sup>

マッケニー、リープスは、省察における分析的・創造的視点についても下記のように示している。<sup>9)</sup>

表2 省察における分析的・創造的視点の例

〈スーザン・マッケニー、トーマス・C・リープス原著 鈴木克明監訳『教育デザイン研究の理論と実践』より〉

タスク	探偵として	発明家として
プロセスを考察する	I 何があったのか半断する	II もしも、を考える
結果を考察する	III 意味を確かめる	IV 他のアイデアと結びつける

表 2 では、プロセスの考察の分析的視点では「Ⅰ 何があったのか判断する」、プロセスの考察の創造的視点では「Ⅱ もしも、を考える」、結果の考察で分析的視点では「Ⅲ 意味を確かめる」、結果の考察での創造的視点では「Ⅳ 他のアイデアと結びつける」となっており、プロセス及び結果の両方について、探知的な分析の視点と発明家的な創造的視点で構成されており、省察の学習において、このように立体的・多角的な振り返りが為されることが肝要であり、様々な学習における省察の視点として有効であると考えられる。

## V 実践方法

授業実践は、R.5 年 4 月から 7 月にかけて、関西国際大学教育学部教育福祉学科・展開科目「音楽Ⅳ・器楽」1 クラス（5 名）2 年生の学生を対象とし、方法は、幼稚園・保育所等、幼保教育現場での実践に結びつく保育技術の向上をめざす目的で制定された「関西国際大学オリジナル保育グレード検定実施要領（ピアノ）」に基づき、レッスン用グランドピアノ 1 台、練習用電子ピアノをひとり一台ずつ使用して対面での個人レッスンをを行った。「音楽Ⅳ・器楽」授業は、初心者はグレード 4 級、ピアノ経験者はグレード 3 級取得が到達目標となっている 1 年次での保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格必修科目「音楽Ⅰ・器楽」「音楽Ⅱ・器楽」の受講を前提とし、初心者は 3 級、ピアノ経験者は 2 級を取得することを到達目標としている。

今期の授業で学生は、自主的に選択した作品で「ソロ」と「弾き歌い」を演奏発表する中間テストを経て、期末テストでは、下記に示す 3 級及び 2 級の課題曲からソロ曲 1 曲と弾き歌い曲 3 曲について、授業第 15 週目に演奏発表を行ったが、授業最終回の直前に個人ワークシートを配布し、記述方法に関する説明を教員が行った。

### 【3 級課題曲】（ソロ）ブルグミュラー 1 頁の作品 2 曲より当日 1 曲指定

（弾き歌い）おもちゃのマーチ・さよならのうた・まつぼっくり

せんろはつづくよどこまでも・かたつむり・虫の声のうち、当日 3 曲指定

### 【2 級課題曲】（ソロ）ブルグミュラー 2 頁の作品 2 曲より当日 1 曲指定

（弾き歌い）ぞうさん・ふしぎなポケット・やぎさんゆうびん・とんぼのめがね

うみ・春がきたのうち、当日 3 曲指定

学生は、これらの課題曲を概ね演奏できるようになった時点で省察的学習としての弾き歌いの活動に対する振り返り個人ワークシートを記述した。記述するにあたり、教員から「かたつむり」<sup>10)</sup>「大きなくりのきのしたで」<sup>11)</sup>「まつぼっくり」<sup>12)</sup>の両手伴奏楽譜と解説が配布された。これらの 3 曲は、期末試験のグレード課題曲及び中間試験（自由曲）で学生が選択した作品である。この 3 曲の中から学生が自主的に作品を選択してワークシートに記述した。その際教員から、保育者に必要な歌唱力及び音楽の楽しさを感じさせるための楽器演奏や身体の動き等、総合的表現力としての「表現技術の向

上」、保育者に求められている「表現活動に対する意欲」、子どもたちの心身の発達や季節の行事にふさわしい「教材選びの確かな目」、導入のアイデアや活動の展開に関する「活動への豊かなアイデア」<sup>13)</sup>について説明し、それらを参考にして記述するよう指導した。

## VI 分析

本章では記述が端的であった学生ABCの弾き歌いの活動に対する振り返り個人ワークシートの記述を取り上げ、弾き歌いの活動がIV章、表2で示した「Ⅰ 何があったのか判断する」「Ⅱ もしも、を考える」「Ⅲ 意味を確かめる」「Ⅳ 他のアイデアと結びつける」にどのように関連づけられたか分析する。

学生Aは、鍵盤楽器経験が10年以上でソナタ終了程度の演奏力、学生Bは、幼少時に2年程度、高校3年時に1年間鍵盤楽器経験がありバイエル終了程度の演奏力、学生Cは、鍵盤楽器経験が大学入学後1年間だけで、バイエル終了程度の演奏力である。学生AとCは「大きなくりのきのしたで」学生Bは「かたつむり」を選択した。以下、1. から4. は、ワークシートの質問項目である。

1. この作品を子どもたちに歌いかけるとき、どんなことに気をつけますか？

(学生A) 大人が楽しそうに歌って大きく表現して子どもたちに表現する楽しさを感じさせる。ただ歌うだけでなく、歌詞に着目して動きを子どもと考えて体で表現しながら歌う。

(学生B) 「でんでん」や「むしむし」など連続する言葉が続くので言葉があやふやにならないように気をつける。付点8分音符と16分音符の違いをしっかりとつける。

(学生C) 表情豊かに大きく表現する。弾き歌いを行う大人の様子が子どもたちに大きく影響を与えるので表情豊かに大きく表現することにより子どもたちの模倣の意欲が高まり、共に表現する楽しさを感じることができると思う。

(分析)

Ⅰ 学生Aは、大人の楽しそうな大きい表現としての歌が子どもたちに表現の楽しさを感じさせると判断し、そこではⅢ歌詞の内容が動きの意味となるので、Ⅰそれらを子どもと考え、Ⅳ体で表現するという他のアイデアと結びつけて歌うことが大切であると判断した。

Ⅲ 学生Bは、連続する言葉の発音の明快さ、付点8分音符と16分音符の違いをしっかりとつけることの意味を確かめた。

Ⅲ 学生Cは、(教育者の)表情豊かな大きい表現の意味を確かめ、そこではⅠ大人の様子が子どもたちに大きく影響を与えると判断し、Ⅰ(教育者の)表情豊かな大きい表現を通して子どもたちの模倣意欲が高まり、共に表現する楽しさを(子どもたちが)感じることができると思うと判断した。

2. 弾き歌いの活動を通して、子どもたちとどのようなことが共有できると思いますか？

(学生A) 歌うだけでなく体で表現することの楽しさを共有できる。一人ではなく友達と一緒にすることで友達と遊ぶことの楽しさを共有できる。

(学生B) 同じリズムが続くのでリズムを理解できたり「つのだせ」からは音の跳躍があるため音程がとりやすくなる。

(学生C) 音楽的な高まりが心情的な高まりと一致しているため、歌うことによる自分の気持ちを表現する大切さや楽しさを共有できると考える。

(分析)

I 学生Aは、(弾き歌いの実践を通して) IV 歌うだけでなく体で表現することの楽しさという他のアイデアと結びつけたうえで、友達と一緒に友達と遊ぶことの楽しさを(子どもたちと)共有できると判断した。

I 学生Bは、リズムの連続により(リズムの)理解がしやすくなることや、跳躍音程の方が歌唱での音程がとりやすくなることが(子どもたちと)共有できると判断した。

III 学生Cは、(作品における) 音楽的な高まりが心情的な高まりと一致しているという意味を確かめたうえで、I (弾き歌いの実践を通して) 自分の気持ちを表現する大切さや楽しさを(子どもたちと)共有できると判断した。

3. 子どもたちとの弾き歌いを通して、子どもたちの活動をどのように広げていくことができるとおもいますか？

(学生A) 歌って言葉を体で表現したり、ペープサートを用いて活動を広げる。絵本を通して歌ったり手遊びを通して活動を広げる。

(学生B) かたつむりのまねをして殻の中からつのはを出すまねをしてみる。

(学生C) 音楽と動きの一体感を通して、空間を使って豊かに表現することを広げていく。

(分析)

IV 学生Aは、言葉を体で表現する、ペープサートや手遊びで活動を広げる、絵本を通して歌うなど他のアイデアと結びつけた。

IV 学生Bは、かたつむりのまねをして殻の中からつのはを出すまねをしてみる身体表現という他のアイデアと結びつけた。

IV 学生Cは、音楽と動きの一体感という他のアイデアと結びつけたうえで、それらについて III 空間を使った豊かな表現の拡大という意味を確かめた。

4. 子どもたちの表現をさらに導きたいとき、どのような活動ができると思いますか？

(学生A) 絵本やペープサート、体で表現する以外にも手拍子を入れてみたり、ゆっくりにしてみるとリズムを入れることで音楽により意欲がもてる。

(学生B) 梅雨に関係あるものを紙で製作してみたり(あじさい・かたつむり)実際にかたつむりを見たりなどして学ぶ

(学生C) 友だちと手をつないだり、2人1組でペアを組んで動いたり歌うことで身体表現を行いながらコミュニケーションをとることができる。また自分たちで動きを考えて実行することで想像力や発想力もきたえることができると思う。

(分析)

Ⅳ学生Aは、絵本やペープサート、体での表現に加え、手拍子やテンポを緩和して(新たな)リズムを取り入れるという他のアイデアと結びつけたうえで、そのことがⅠ(子どもたちの)音楽に対する意欲を高めると判断した。

Ⅳ学生Bは、あじさい・かたつむり等、梅雨に関係あるものの紙での製作や、実際にかたつむりを観察するという他のアイデアと結びつけた。

学生Cは、Ⅳ友だちと手をつないだり、2人1組でペアを組んで動いたり歌う身体表現という他のアイデアと結びつけたうえで、そのことがⅠコミュニケーションをとることにつながり、自分たちで動きを考えて実行することで想像力や発想力もきたえることができると判断した。

## VII まとめと今後の課題

弾き歌いの実践を通じた学生ABCの省察において、全般的に分析的視点としてのプロセスや結果の考察及び創造的視点としての結果の考察が為されたが、創造的視点としてのプロセスの考察は為されなかった。このことから、子どもたちに対する弾き歌い指導の経験のない学生において、プロセスの中で創造的視点としての多様なケースを想定し対応する認識が難しいと考えられる。

弾き歌いの実践を通して、教育者としての配慮や子どもたちとの共有について、鍵盤楽器経験が初心者レベルの学生より鍵盤楽器経験の長い学生は、新たなアイデアと結びつけることが多く、また初心者レベルの学生が鍵盤楽器経験の長い学生より結果の意味の考察が多く為された。このことから、鍵盤楽器に熟達している学生の方が視野を広くして弾き歌いの実践を行う余裕があるが、反面初心者レベルの学生のように、その都度意味を確かめることが少なくなる傾向にあるのではないかと考えられる。

今後の課題として、弾き歌いの実践をどのように拡充させ授業カリキュラムの再構築につなげることができるのか、ワークシートの設問内容も含めて検討が必要である。

## 引用文献

- 1) 津守真(1987)『子どもの世界をどうみるかー行為とその意味ー』日本放送出版協会 p. 15
- 2) 青木久子(2021)『幼児教育 知の探究 19 領域研究の現在〈表現〉』(株)萌文書林 p. 281

- 3) 同掲書 1) p. 93
- 4) 同掲書 2) p. 282
- 5) 同掲書 1) p. 198
- 6) 同掲書 2) pp. 282-283
- 7) 脇本健弘(2020)『教師の学びを科学するーデータから見える若手の育成と熟達のモデルー』(株)北大路書房 pp. 50-51
- 8) スーザン・マッケニー、トーマス・C・リーブス原著 鈴木克明監訳 (2021)『教育デザイン 研究の理論と実践』(株)北大路書房 鈴木克明監訳 高林友美訳 (第6章) pp. 209-211
- 9) 同掲書 8) pp. 184-186
- 10) 川北邦子・坂本久美子編著 (2017)『幼稚園・保育所・家庭で 楽しくうたあそび123』(株)ミネルヴァ書房 pp. 60-61
- 11) 同掲書 10) pp. 72-73
- 12) 同掲書 10) pp. 84-85
- 13) 同掲書 10) pp. 31-32

※ 本研究は関西国際大学研究倫理委員会において研究倫理審査会に諮り、同委員会の承認(関西国際大学 研倫委審第 R5-13 号)を得たものである。

## Abstract

In student ABC's reflections through the practice of playing and singing, generally the process and results from an analytical perspective, and the results from a creative perspective were considered, but the process from a creative perspective was not considered. This suggests that it is difficult for students who have no experience teaching children to play and sing to imagine and respond to a variety of cases from a creative perspective during the process.